

第47回定期演奏会 批評

音楽現代 2006年12月号

◆東京ニューシティ管弦楽団 第47回定期演奏会

内藤彰指揮によるブルックナーの交響曲第9番、キャラガン2006年版による終楽章付き。第1楽章は太い音の金管、切々たるヴァイオリン、透明感ある木管などによる安定感ある演奏。クライマックスも重厚となったが、和声感についてはいまひとつ、第2楽章ではかっちりしたリズムによる迫力ある響き。第2稿によるトリオは、ゆったりとしたテンポ設定で、ヴィオラの素朴な民謡風の節が興味深かった。第3楽章は繊細で悲愴感ある表現。ただ、線的ではなく、リズムの縦の線が目立っていた。第4楽章の弦の切々たる表現や勇壮たる総奏は説得力があったが、印象的なはずの不協和音は鳴りをひそめ、全体的な起伏の点ではいま一步。キャラガンはフーガや、コラール主題の再現などで詰め合わせて、迫力あるコーダとして仕上げたが、整合性に関しては疑問が残った。

前半のワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』より「愛の死」では蔵野蘭子(S)が感情の変化に添った深みのある歌唱を聞かせた。(9月28日、東京芸術劇場)

(菅野泰彦)

音楽の友 2006年12月号



東京ニューシティ管弦楽団

オーケストラ 東京ニューシティ管弦 楽団(第47回)

作曲家と同等の才能がない限り、その作品の補作完成など不可能である。それゆえ評者は、ブルックナーの「第9交響曲」第4楽章の補作楽譜の、ましてその「最新改訂版」などには単なるゲーム的な興味以上のものを感じることはできない。キャラガンがいかに楽譜校訂に功績があるろうと、彼のまとめた「第4楽章」は、作曲家による前3楽章とは似ても似つかぬものだ。主題には壮大な幅広さもなく、風格も高貴さも不足している。オリジナルの草稿を基にしたというなら、まさにそのスケッチにおける靈感の不足こそ、作曲家をして完成をためらわせた一因ではなかったのか。が、それを論じるのはこの稿の役目ではない。音楽監督・常任指揮者の内藤彰が進める「ブルックナー新稿の世界初演シリーズ」がファンの関心を惹いて止まないことは、評者も熱烈な愛好者の一人として認めよう。最初の3楽章(コールドズ版)の中で、スケルツォのトリオに作曲家自身の雑然とした「第2稿」が取り上げられていたのも、文献的には興味深い。オーケストラは見事な熱演で、重厚な力感を存分に発揮した。前半には蔵野蘭子をソリストに「トリスタンとイゾルデ」から「前奏曲と愛の死」。9月28日、東京芸術劇場

●東条碩夫